
飛ばされた先は木ノ葉

羽田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛ばされた先は木ノ葉

【コード】

N9598P

【作者名】

羽田

【あらすじ】

ハヤテがNARUTOの世界に飛んだ話です。

消えたハヤテ（前書き）

例によってひなたのゆめ様に投稿させていただいていた作品です。
ちなみにこれで打ち止めです。

時間軸はナルトの方は、草隠れの天地橋から帰って来た位なので死んだはずの人が出てきたりします

消えたハヤテ

三千院家の一室

メイドが執事を治療している。

「大丈夫ですかハヤテくん、あまり無理しないでくださいよ。」

「すみませんマリアさん、でもお嬢様を守る為ですから。」

なぜ治療を受けているか、それは最近、主である三千院ナギを狙う者が増えていて、しかも襲ってくる相手の強さが上がってきているので、主を守る為には、どうしても無傷じゃ守りきれず今も、頭と腕に怪我を負い包帯を巻いている。

（でも、僕が怪我するのはいいとしてもこのままじゃいつか、お嬢様に被害がおよぶかもしれない。なんとかしないと）

ハヤテは治療を受けながら考えていた。

「マリアさん、三千院家の書庫で調べものをしたいんですけど、いいですか？」

「別にいいですけど、怪我してるんですから調べた後は、ちゃんと休んでくださいよ。」

三千院家書庫

「やっぱり見つからないなあ。」

ハヤテは、何か主を守るために役立つ物が無いか探しているのだが、特にいい物は見つからない。

「ん！何だろうあの箱？」

ハヤテは、細長い小さな箱を見つけた。

その箱を開けると巻物が入っていてそれには、異界口寄せと書かれていた。

「なんだろう？」

ハヤテは、巻物を開いてみた。

中にはビッシリと文字が書かれた中に、掌の形の空白が開いていた。

「なんだかよくわからないな、なんで掌の形の空白があるんだろう？」

なんとなくその空白に掌を合わせてみる。

ボン！！

突然、発生した煙が晴れると、今迄いた少年の姿が消えていた。

「イタツ あれ此処は三千院家の書庫じゃない。」

治療したばかりの頭を押さえながら辺りを見る。だが明らかに、自分が居た筈の書庫とは違う部屋に驚く。

するとすぐに部屋のドアが開いた

「何者だ？」

状況説明

状況が読めず辺りを見渡していると、突然二人の女性が部屋に入ってきた。

一人は、驚いた顔した後何かを考えていた、もう一人は、ハヤテの顔を見た途端険しい顔をして臨戦態勢と取った。

「何者だ？何故此処にいる？」

状況が読めていないハヤテは、曖昧に答える

「えーと僕も知らないうちに来てたんで、何とも言えないんですけど。」

その答えを聞いて、更に険しい顔になり怒鳴る。

「ここを何処だと思ってる！火影様の屋敷だぞ、知らないうちに来れるわけないだろう。」

今にも攻撃しそうなところを、もう一人が止める。

「まあ落ち着けシズネ、私の予想通りならコイツは、何も知らん。」

そう言われてシズネは、少し冷静になり聞いた。

「どづい事ですか？綱手様。」

綱手は、ハヤテに向かって言った。

「お前、異界口寄せと書かれた巻物に触ったんじゃないのか？」

今にも攻撃されそうだったハヤテは、慌てて答えた。

「そうなんです、その巻物を触った途端ここに来ちゃたんですよ、ここは何処なんですか？」

綱手は、やっぱりと呟き、面倒くさそうな顔をした。

「二人とも説明してやるから落ち着け。」

その言葉に二人は、落ち着きを取り戻した二人を見て綱手は、話し始めた。

「お前が触った巻物には、特別な口寄せと呼ばれる術が施されていて、ここはお前からすれば異世界になる。」

その言葉を聞いて二人の声が揃う。

「」「ど、どういうことですかそれは。」「」

綱手は、ハヤテに向かい問いかける。

「お前、名前は？」

「綾崎ハヤテです。」

「そうか、綾崎お前の居た世界に忍者はいたか？」

「忍者ですか？僕は、物語位でしか知らないですね。」

その答えを聞いてシズネは、驚く。

「この時代に忍者を知らないなんてそんな人いるわけがない。」

綱手は、説明を続ける。

「だから、異世界の人間と言っただろうが。そいつが触った巻物は、初代と二代目火影が作った特別な術式が施されたものを異世界に飛ばして、それに触れた人間をこの世界に口寄せする代物なんだが、もう全て無くなったと聞いていたがまだ残っていたんだな。」

その説明を聞いていてハヤテは、焦った。

「本当に異世界なんですか？」

「ああ」

「ちなみに、帰る方法ってあるんですか？」

「あるぞ。」

「あるんですか、よかったです。」

「だが今は、無理だ。」

「今は、無理って何故ですか？」

「言っただろ、これは特別な術なんだ。お前を元の世界に帰すには、私と自来也という奴の二人でやらないといけないんだ。」

「その自来也さんは、居ないんですか？」

「ああ情報収集に出かけていて、いつ戻るかわからん、だが自来也が帰るまではどうにもならん。」

その説明を聞いてハヤテは、考えていた。

（お嬢様が心配だけど、自来也って人が帰ってこないと元の場所に戻れないって言われたしなどうしようかな）

突然、シズネが話しかけてきた。

「ところで頭は大丈夫ですか？」

「え？」

ハヤテの頭の傷は、突然の口寄せやシズネと綱手との問答の間において包帯が真赤になっていた。

ハヤテは、突然知らない所に飛ばされて忘れていた傷の事を思い出して、今指摘された頭の他に腕もかなり痛む事に気がついた。

「大丈夫と言いたい所ですけど、かなりヤバイです。」

「おひとりあえずその頭と腕治してやるからじっとしている。」

そういつと綱手は手から光を出しハヤテの頭にあてた。

「なんですかこの光は、痛みが和らいできましたけど？」

「これは医療忍術だ、とりあえず応急処置をしてやる。」

「へえー忍術ってすごいんですね、応急処置っていうか傷がほぼ完治してるんですけど。」

(よく解らないけど、あんな巻物で人を移動させたりこつやって傷を治したり忍術ってすごいなあ、もしかしてこれを使えるようになれば、お嬢様を守る力になるかもしれない)

「あの、綱手さん一つ聞いてもいいですか？」

「なんだ、綾崎言ってみろ。」

「忍術って、他にどんなものがあるんですか？そして僕にも使えますか？」

「ほう興味があるか、じゃあ説明してやろう忍者が使う術は、大きく分けて三つある。まず一つ目は忍術だ、これは火や水を操って攻撃したり傷を治療したりさまざまな種類がある。二つ目は幻術、これは相手に幻覚を見せることができる。三つ目は体術、これは自分の肉体を使い攻撃がするものだ。」

「あと術は、お前にも使えるだろう、お前の世界の人間は使い方を知らないだけらしいからな。」

「じゃあ自来也という人が帰るまで、教えてくれませんか？」

「いいだろうシズネ、カカシを呼んで来い。」

「はい綱手様。」

シズネは、部屋を飛び出した。

はたけ カカシ

シズネを待つ間、ハヤテは屋敷の外に出て、綱手からさらに詳しく忍術や体術の種類のことやチャクラについて術のこと、それに木の葉のことの説明を受けていた。

「お呼びですか五代目」

シズネと共に、片目を額当てで隠した男が現れた。

「来たかカカシ、少しお前に頼みたいことがあるんだ」

「それは、その少年に関係あるんですか？」

「ああその通りだ。こいつは綾崎ハヤテといって特別な口寄せによって、異世界からここに来てしまったんだが、元の世界に帰すには私と自来也の二人揃わないとならないんだ」

「知つてのとおり自来也様は、いつ帰って来るか解りません」

「その間こいつが忍術を覚えたいと言うから、実際に忍の戦いを体験させてやるうと思つてな、相手してやってくれるか？」

「まあいいですよ。じゃあ、綾崎君とりあえず本気でかかてきてよ」

「はい、いきます」

そう言うとハヤテは、カカシに向かって蹴りを放つがカカシは、それを避ける。

「なるほど、身のこなしはなかなかのものだね、希望通り忍術を見せてあげようか」

カカシは、印を結んだ。

「火遁 豪火球の術」

カカシは、口から巨大な火球を吐き出した。

ハヤテはかわしたがかなり驚いている。

（話には聞いていたけど、本当に人が火を吐くなんて離れていたら危ないとりあえず接近戦で戦おう）

ハヤテはカカシに近づいて打撃を放つ、その中の一発がカカシに当たった。

ボン！！

カカシの体が跡形もなく無くなる

「えっ？」

「影分身だよ」

後ろからカカシの声が聞こえて、ハヤテは慌てて距離をとる。

（この人もすごく強い、こうなったら必殺技しかない）

「ハヤテのごとく！！」

カカシに向かい高速で突っ込む。カカシは少し驚くがそれをかわした、その後ハヤテはそのまま木にぶつかった。

「今の技は、なかなか良かったけどいくつか欠点があるね」

ハヤテは、立ち上がりながら問いかける。

「欠点ですか？」

「スピードや威力があるけど軌道が直線的でよけられやすいし、相手のカウンターに反応できない、最後に自分にダメージがある」

「たしかにその通りです」

「俺も昔、同じ弱点を持つ術を開発して敵のカウンターで痛い目を見たよ」

「結局その技は、完成しなかったんですか？」

カカシは額当てに手を伸ばしながら答える

「俺の場合、これのおかげで完成できたよ」

そう言って見せたカカシの左目は、赤く瞳に三つの巴形の印があった。

「なんですかその左目は？」

「これは写輪眼といって、相手の動きを見切ったりコピーすること

ができる特別な目だま、これは教えられるものじゃ無いけどね」

「実際に忍術を見てみて、話で聞いていた以上に凄かったです。カカシさんありがとうございます」

「五代目、彼の修行相手の事ですけど、俺はナルトの新術の修行に付き合わなければならぬんで代わりに良いと思う相手が居るんですけど」

「たしかにそいつが適任かもしれないなカカシ、呼んできてやれ」

「はい」

そう言うとカカシは、何処かに消えてしまった。

「私も忙しいんでこれで戻るが、お前はここでカカシを待っている、いくぞシズネ」

「ありがとうございます」

ハヤテがカカシを待っていると、一人の少年が現れた。

襲撃者

カカシを待っていた、ハヤテに金髪の少年が話かけてきた。

「お前見ない顔だな、誰だつてばよ、どこから来て何の為に木の葉にいるんだ？」

その問いに困り、曖昧に答えるハヤテ。

「何と言つたらいいか」

その様子を見てナルトの表情が変わる。

「お前、何か怪しいつてばよ、とっ捕まえて綱手のばーちゃんに突き出してやる」

「いや、ちょっと待って下さい」

「問答無用、影分身の術」

ナルトが五人になりそのうち三人がハヤテに突っ込んでくる、ハヤテは三人の攻撃をかわしながら一人一人分身を消していく。

ボン！！

最後の三人目を消すと手から高速回転する球状の物を放つナルトが迫ってくる。

「螺旋丸」

ハヤテは、なんとかかわし木に突っ込んだナルトを見ると、ナルトの螺旋丸が当たった木が抉れている。

(危なかった、あれに当たってたら、ただじゃ済んでいない)

「じゃあ、これならどうだ」

ナルトは、巨大な手裏剣を投げてきた。それをハヤテは飛んでかわす。

「そこだ!」

ボン!!

ナルトが投げた手裏剣がナルトに変わり、ハヤテに向かいクナイを放つ。

(やばい、避けられない)

空中で、身動きが取れないハヤテには為す術がない。

キーン

ハヤテに当たりかけていたクナイが、何処からか飛んできた手裏剣に弾かれる。

「なっ」

それを見たナルトは、ハヤテの方に向おうとする。しかし、誰かが

立ち塞がる。

「待って下さいナルト君。彼は怪しい者ではありません」

「ゲジマユ」

「全く、お前は喧嘩っ早いんだから」

「カカシ先生」

ナルトのクナイを弾いたカカシとナルトを止めたリーが、ナルトを落착させる。

「すまないね、綾崎君コイツ少しそそっかしくて」

「いえ助けてくれてありがとうございます」

状況が解っていないナルトが、問いかける。

「結局、こいつは何なんだってばよ？」

「この子は、特別な口寄せで異世界からここに来ちゃって、元の世界に帰るには自来也様の帰りを待たないといけないんだけど、その間忍術の修行をすることになったんだ」

「へえー、悪かったな急に攻撃して」

「気にしないで下さい」

「俺は、うずまきナルトお前は？」

「僕は、綾崎ハヤテです」

「それと何でゲジマユがいるんだ？」

「綾崎君の修行相手だよ、俺は、お前の新術の修行に付き合わなくちゃならないからな」

「ロック・リーです。よろしくハヤテ君」

「よろしくお願ひします」

「リー君は、体術のスペシャリストだから、いきなりなれない忍術相手よりもやりやすいと思ってね」

「早速修行を始めましょう、ナルト君相手にあれだけやれるとはたいたしたものです」

早速、組み手を始めようとするリーをカカシが止める。

「まあ待てリー君、綾崎君は俺とナルトと続けて戦ったんだ、今日はチャクラの練り方やコントロールを教えてあげてくれ」

「そうですね解りました、今日は我慢しましょう」

「それから、もう怪しまれないように五代目様に言っておいくよ、行くぞナルト」

「じゃあなハヤテにゲジマユ」

二人は去って行った

「じゃあチャクラの練り方から教えます」

そのすぐ後に綱手によってハヤテの容姿と何故木の葉に居るかが、
里の者全員に伝わった。

リーVSハヤテ

木の葉隠れの里 演習場

「行きますよ、ハヤテ君」

「はい、リーさん」

まず、リーがハヤテに向かって行く。

リーが放つ打撃をかわすハヤテだが、リーの動きにだんだんついていけなくなり、ガードこそしたが蹴りで吹き飛ばされる。

(速いうえになんて重い打撃なんだ)

「まだまだいきますよ」

そう言つとリーは、またハヤテに向かって行つた。

「木の葉旋風」

ハヤテはリーの上段回し蹴りを、しゃがんでかわしたはずがまたもや吹き飛ばされてしまった。

ハヤテは、かわしたはずの蹴りをくらつたので、驚いている。

「何ですか、今の蹴りは？確かにかわしたはずなのに？」

「今の技は、木の葉旋風という、まず上段回し蹴りを放ち、それを避けた相手に下段回し蹴りを当てる体術です」

「速さも、威力も、技術もまるで敵わない。やっぱりものすごく強いですね、リーさん」

「いえ。ハヤテ君の動きも、なかなかのものですよ」

「今度は、こちらからいきます」

ハヤテは、リーに向かい打撃を放つが、避けられるかガードされ、その後カウンターをくらってしまったり、リーの攻撃を防げずにロボロにされてしまう。
様子を見に来ていた力カシが、言う。

「いやー。ずいぶんとロボロにされたね、ハヤテ君」

「はあはあ。全く歯が立ちませんでしたけど、勉強にはなりました」

「そう、それなら、修行相手にリー君を連れて来た甲斐があったよ」

「僕も、役に立っているのなら嬉しいです」

「チャクラコントロールの方は、どうだい？」

「なんとか、木登りができるようになりました」

「そうか。ならそろそろ、忍術を覚えてもいいかもね」

「そうですね、ハヤテ君ならきっと、すぐ使えるようになりますよ」

「それなら教えて下さい」

「じゃあ、あまり長くは教えられないけど、基礎を少しだけ教えてあげるよ」

そうしてカカシは、初歩の忍術をいくつかハヤテに教えていった。

「見つけたか？」

「はい、木の葉にいるようです」

「木の葉か、行くぞ」

性質

「強くなりましたね、ハヤテ君」

「なんとか、リーさんの動きに、ついていけるようになっただけですよ」

「それだけじゃないですよ、水面歩行の業もできるようになったし、カカシ先生から習った基礎の忍術もうまくできるようになったじゃないですか」

「思っていた以上に、強くなっているようだな、綾崎」

突然現れた綱手に、驚く二人。

「綱手さん」

「どうなさったんですか、火影様」

「綾崎には悪いんだが、リーに頼みたい任務があつてな」

リーは残念そうに、ハヤテを見る

「分かりました。ハヤテ君、残念ですが修行は、一旦お休みです」

「リーさん、今まで付き合ってくれてありがとうございました」

「忍術も使えるようになったようだし、チャクラコントロールもなかなかのようだ、この機会に性質変化の修行でもしてみるか？」

その問いにハヤテは、即答した。

「やります」

その言葉を聞くと綱手は、一枚の紙を取り出し、ハヤテに差し出す。

「よし、じゃあ、この紙にチャクラを流し込んでみる」

紙を受け取りながら、ハヤテが尋ねる。

「なんですか？この紙は」

「これは、チャクラを吸って育つ特別な木から作った、チャクラに反応しやすい感応紙で、これにチャクラを流し込めばその者が、何の性質を持っているか調べることができる、何の性質が出たかで、次のお前の修行相手を、決めてやる」

「分かりました。やってみます」

ハヤテは紙にチャクラを流し込む。
すると紙が真っ二つになった。

「ほう風の性質か、なかなか珍しい性質を持っているじゃないか」

「風、ですか」

「ああ風の性質は、近・中距離戦において一番の攻撃力を持つから、リー仕込の体術と合わせれば、かなりの威力になるだろう」

「やりましたね、ハヤテ君」

「風なら、丁度いい奴が一人居るぞ」

「誰ですか？」

「上忍、猿飛アスマだ」

アスマを訪ねて

「えーと、どうしようかな？」

ハヤテはアスマを訪ねて、教えられた場所に行ったのだがその場所には誰も居らず、他に心当たりもあるわけなので途方に暮れていた。

「あつれー、アスマ先生いねーじゃん何処行っただってばよ」

「ナルトさん」

「なんだ、ハヤテじゃねーか、こんな所でなにしてんだ？」

「実は、猿飛アスマさんに風の性質変化を習いに来たんですけど、見当たらず」

「俺もアスマ先生に、風の性質変化を習いに来たんだってばよ」

「そうなんですか、でもアスマさんは、何処にいるんでしょう？」

「とりあえずそこらへん、探してみようぜ」

「そうですね」

そして二人は、アスマを探して歩きだした。

歩き始めて数分後

「あら、ナルトじゃない、こんな所で何してんの？」

二人の前にピンク色の髪をした女子と笑顔を浮かべた男子が現れた。

「サクラちゃん！それにサイ、ちょっとアスマ先生に聞きたい事があったて、探してるんだってだよ」

「へえー、もしかして隣に居るのは、異世界から来たっていう人？」

その言葉を聞き自己紹介をするハヤテ。

「綾崎ハヤテです」

「私は、春野サクラで、こっちがサイ」

「サイと申します、よろしく」

「よろしくお願いします」

「この二人は、俺と同じ班の仲間だってだよ」

突然、サイが笑顔でハヤテに向かい言う

「君の顔って女顔で貧相だね」

「おい！サイ、急に何言ってるんだ」

「そうよ、失礼でしょ。」

「悪いなコイツ空気読めなくて、思ったことすぐ言っちゃうんだ」

「いいんですよ、言われ慣れてますから気にしないで下さい」

そう言うハヤテだが、かなりダメージを受けている。

(まさか異世界に来てまで言われると、さすがにきついなあー)

「まあコイツは空気読めないけど悪い奴じゃあ無いんだってばよ、サクラちゃんも怪力で凶暴だけど、とってもいい奴だし」

バキ！

その言葉を聞いたサクラが隣に在った木をへし折る。

「誰が怪力で凶暴ですって」

「わー、ゴメンてばよサクラちゃん」

(サクラさんってまともだと思ってたけど恐いなあー)

「それじゃあまたな二人とも」

「あつ、待って下さい、ナルトさん」

ナルトは、さっさと逃げ出しその後ハヤテが続く。

森の中

「はあはあ、危なかったてばよ」

「はあはあ、本当に恐かったですよ」

二人とも、死の恐怖から逃れるため全速力で走って来てへとへとである。

「おい、止める。誰かいるぞ」

突然、声が聞こえたと思えば、何かが降ってくる。

あれ？いのは？

突然聞こえた声に反応して、空から降ってくる何かを避けようとするが、間に合わない。

二人は、これから来るであろうダメージに身構えていたが、降って来ていたものは、空中で止まっていた。

「ふうー間一髪、影真似の術成功」

「シカマル、それにチヨウジ、お前らかよ」

二人を押しつぶそうになり、シカマルによって止められたものが、二人に謝る。

「ゴメンね、二人とも普段、人なんて来ないから周り確認してなくて」

シカマルは、ハヤテに気付き、話しかける。

「あんたが、リーと修行してるっていう奴か、悪いな、俺達の不注意で潰しちまいかけて」

「いいえ、気にしないでください」

「俺は、奈良シカマルだ」

「僕は秋道チヨウジ、よろしくね」

「綾崎ハヤテです」

「そうだ！お前らならアスマ先生の居場所知ってんじゃねーのか？」

「アスマの居場所？そりゃ知ってるが、お前らアスマに用があるのか？」

「ああちよつと俺達、風の性質変化のコツを教えて欲しくてな」

「なんだお前達、性質変化の修行始めたのかよ、ありゃ才能ないと駄目だぜ」

「ナルト、アスマ先生ならもう少ししたらここに来るはずだから待つていなよ」

それを聞いて、二人は喜ぶ。

「マジでかチョウジ、やっと見つかったてばよ、やったなハヤテ」

「はい」

アスマを待つ間四人は、ハヤテの事を聞いたり、ハヤテにいろいろな事を話して過ごしていた。

「よう、お前ら随分楽しそうじゃねーか」

「……アスマ（先生）……」

（この人がアスマさん）

四人は、話しかけてきた男の方を見る。

「ナルトと異世界から飛ばされてきたって言う奴じゃなーか、どうしたんだこんな所で？」

「アスマに用があるんだとよ」

「そうだってばよアスマ先生、俺達に風の性質変化の事教えて欲しいんだってばよ」

「お前ら風の性質なのか、まあ教えるくらいならいいぞ」

「俺達は、そろそろ帰るぜ」

それを聞いてハヤテは、二人にお礼を言う。

「シカマルさん助けてくれたり、いろいろな事教えてくれてありがとうございます。」

あとチョウジさんって、デ……

（（コイツ、まさか禁句言う気じゃないだろうな））

（で）会い方は衝撃的だったけど、とてもいい人で安心しました」

「そんな事は無いよ、最初潰しそうになって本当にゴメンね」

二人は、笑って話しているが他の三人は、疲れているようだった。

「「どうしたの(しました)三人とも?」

「いや、何でもねーよ、行こうぜチヨウジ」

二人が何処かへ行った後、ハヤテはもう一度二人に訪ねた。

「やっぱり何か態度がおかしくありませんでしたか?」

「いや、お前がチヨウジに向かってデブって言うんじゃないかって思ったんだってばよ」

それを聞いてハヤテは、驚いた。

「ええー、会ったばかりの人に向かってそんな事、言うわけないじゃないですか」

「いや、お前だってサイの奴に会っただろうが、アイツは、俺が止めてなければチヨウジに向かってデブって言ってたぞ」

「それにしても、それだけであんなに焦ってたんですか?」

「アイツは、デブって言われると、キレて暴れだすんだってばよ」

「そうなんですか」

「とりあえず、本題に入るか、お前ら風の性質変化について教えて欲しいんだっつたな」

「そうなんだってばよ、俺、今、風の性質変化の修行してて、コツを教えて欲しいんだってばよ」

「僕も、綱手さんが、そろそろ性質変化を覚えてもいいんじゃないかって、言ってくれて、できれば教えて欲しいんですけど」

「いいだろう教えてやるよ、風の性質変化は、チャクラを二つに分割して、擦り合わせるイメージだ、そして、二つのチャクラを薄く研ぐような感じで練りこめ」

「コツは、より薄く鋭くだ」

「ありがとよ、アスマ先生、じゃあ、俺は修行に戻るぜ」

そう言ってナルトは、カカシとヤマトの待つ修行場に戻っていった。

「お前には、初めから教えてやるよ」

「はい、お願いします」

リベンジ ハヤテVSリー

綱手は呼んでいたアスマに聞く。

「どうだ、アイツの修行の様子は？」

「そりゃあもう、異常なくらい真面目に修行してますよ」

「そうか、具体的にどの位、修行が進んでるんだ？」

「元々、才能があつた上になんか努力してたんで、性質変化と形態変化の両方覚えて、いくつかの新術を作ってますよ」

綱手は、その言葉に驚く。

「もうそこまで修行が進んでいたか、強くなるとは思っていたが、ここまで成長スピードが早いとは驚いたな」

「任務から帰って来たリーに、修行の成果を見せるって言ってましたから、今頃戦ってんじゃないですか」

「それで、お前はリー相手に綾崎が勝てると思うか？」

「まあ、今のアイツの実力は、リーにだって劣ってないと思いますよ」

木の葉演習場

ハヤテとリーが対峙している。

「アスマ先生の話だと、随分腕を上げたそうじゃないですか」

「ええ、今なら前みたいにな、全く齒が立たないってことは無いと思いますよ」

「では、僕も最初から本気で行かせてもらいますよ」

「行きますリーさん」

まずハヤテがリーに蹴りを放つ、リーはそれを避け、拳を放つ、ハヤテくらい、リーから一度距離を置く。

「やっぱり、ただの体術じゃあ、勝ち目が無いですね」

そう言ったハヤテの腕に風が集まる。

「風遁 風刃装」

ハヤテの脚に風の刃を纏っている。

「それがハヤテ君の新術の一つですか？」

「ええ、行きますよ。木ノ葉大旋風刃」

ハヤテは、ローキック、ミドルキック、ハイキックを連続で出していくがリーはそれをかわしていく、最後の踵落としをハヤテが放つ。

「木ノ葉昇風」

ハヤテの踵落としをリーは、蹴り上げて防いだ、ハヤテはまた、離れる

「今のは、危なかったですよハヤテ君、次はこちらから行きます」

リーがハヤテに向かっていく。

「木ノ葉烈風」

リーは、強力な下段回し蹴りを放つが、ハヤテはジャンプでそれを避ける。

「まだです」

リーは追い打ちで蹴りを放つが、ハヤテの腕に弾かれる。

「何ですかその腕は？」

いつの間にかハヤテの腕には、竜巻のような風の塊を纏っていた。

「風遁 螺旋装です」

「なるほど、その腕の風に僕の蹴りが弾かれたんですね」

「その通りです、でもそれだけじゃ無いですよ」

ハヤテがリーに殴りかかる、リーはそれを避けていくが、ハヤテの

拳が当たった地面は削れている。

「やっかいですね、その腕の風は、攻防一体の武器って訳ですか、しかも腕に気を取られたら脚の刃で切られてしまいます」

「これで少しは、対等になれましたか？」

「そうですね、本当にハヤテ君は強くなりました、でも僕もまだ負けませんよ」

「これならどうです。風遁 飛風刃」

ハヤテは、離れた所からリーに向かい蹴りを放つ、すると脚に纏っていた風の刃がリーに向かい飛んでゆく、リーはそれをかわすが、かなりのスピードと切れ味があった。

「脚の刃を飛ばせるんですか」

「まだまだ行きますよ。木ノ葉螺旋旋風」

いつの間にかハヤテは、脚に螺旋装を纏っていた、リーはハヤテの蹴りを避けながら、一度大きく距離とる、それに対してハヤテは、腕纏った風刃装から、連続で風の刃を数発放つ

「腕と脚の術を好きに変えることまで、できるとは」

「腕と脚に纏った術を状況によって変える、これぐらいししないとリ
ーさんには、勝てそうにもないですから。でも飛風刃は、手と脚で
差がでてしまっただけですね」

「差ですか」

「腕で使うときは、脚で使うときほどスピードと威力がなくて、脚
で使うときは、腕のように連続で出せないんです」

「なるほど、確かにそうでしたね」

ハヤテがもう一度近づいてきて蹴りを放つ、リーはそれを避けなが
らハヤテを蹴り上げる。

「しまった」

「隙アリです」

空中で避ける事のできずガードも間に合わないハヤテに向かい、リ
ーの蹴りが迫る。

「風遁 風蹴り」

空中で避けられない筈のハヤテが蹴りを避ける。

「今、風を使って空中を移動しましたね」

「そうです、この風蹴りは、脚から出した風の足場を蹴って空中を
移動できる技なんです」

「今のは決まったと思ったんですけど、そんな術まで持っていたとわ」

「こんな使い方もできますよ」

ハヤテは、リーに向かって跳んで行く、リーはそれを蹴りで迎え撃とうとするが、ハヤテは風蹴りを使い突然方向転換する、リーは、反応したが、ハヤテが風蹴りを使い加速して近づいてきたので、ガードするのが精いっぱいだった。

「ぐあ」

吹き飛ばされるリー。

「今のはかなり効きましたよ、空中で自在に方向転換できるうえに、加速までできるとは予想以上に、厄介な術ですね」

「やっぱりリーさんは凄いですね、あれだけやってもガードできるなんて」

（今までは僕の術を知らなかったから、何とか押せているけど、基本的な身体能力や体術ではまだリーさんが上だから、このままじゃあ勝てないだろうな）

ハヤテの予想通り、術に慣れたリーはハヤテと直角以上に戦っている。

「本当に強くなってますよハヤテ君でも、僕もまだ負けませんよ」

(残りの術は三個そのうち使えそうなのは、一個か)

「リーさん最後にこの術を見せます」

「いいでしょう、来てください」

「風遁 疾風のごとく」

風を纏ったハヤテがリーに向かい突っ込んでいく。

「速い!？」

リーは、ハヤテの攻撃をなんとかかわす

「まだです」

かわされたハヤテが方向転換する。

「くっ」

次はかわしきれず、なんとかガードするリー。

ガードしたリーをハヤテが吹き飛ばす。

「どうですかリーさん」

「はあはあ、まさか方向転換するとは、でもまだ終わってませんよ」

リーがハヤテに向かい蹴りを放つ、ハヤテはかなりチャクラを使ったので螺旋装を出せず、体力も限界に近いので、ガードするのが精いっぱいだ。

「ぐあー」

吹き飛ばすハヤテ。

「僕の負けですなーさん」

「いいえ、ほぼ引き分けですよ、僕もボロボロですから」

「いやー本当に強くなったね、綾崎君」

「カカシさん（先生）」

「ナルトが休憩中だから様子を見に来ただけど、まさかリー君とあそこまで戦えるとは、それに最初の腕試しの時の技も完成させているし、随分頑張ったんだね、

二人ともボロボロだからしっかり休みなよ、じゃあ俺はこれで」

そう言うとカカシは、ナルトの修行に戻った。

晃邑丸

「僕に見せてくれた術の他に術はあるんですか？」

「あと二つありますけど、リーさんが相手じゃあ使えないので使いませんでした」

2人は、休憩しながら話をしていて、すると10歳ぐらいの男の子が走っているのを見つけた。

「珍しいですねこんな所に子供がいるなんて」

走っていた男の子は、ハヤテとリーに気が付き近ずいて来たので、ハヤテが質問する。

「こんな所で何をしてるんですか？」

「いたぞ」

突然、動物の仮面を付けた男が2人現れた。

「暗部の方々がなぜこんな所に？」

するとその男の子は、ハヤテの後ろに隠れた。

「勝手にいなくなってもらっては困ります」

ハヤテの後ろから男の子が答える。

「ずーと屋敷の中にいて退屈なんだ、ちょっと散歩するぐらいいいじゃないか」

「散歩するのはいいんです、我々に黙って外に出られては困ると言っているのです」

「だってお前ら、仮面しててるし無愛想だし一緒にいてつまらないんだもん」

状況も分からず暗部と男の子に挟まれているハヤテとリーは、困惑していたがとりあえずリーが質問した。

「事情がよく分からないのですが、この子は誰なんです？」

「そのお子さんは、火影様のお知り合いの大名のお子さんで（こいし）晃（あきら）邑（むらと）丸（まる）様だ」

「それで何故木の葉にいるんですか？」

「実はな、火影様の知り合いである晃邑丸様のお父様が急病で亡くなり、自分が次の大名になると親戚達が晃邑丸様の命を狙って、忍まで雇っているから晃邑丸様が次の大名に決定するまで火影様の屋敷に匿（かく）っているんだ」

「どこの世界にでもそういう話は、あるものなんですね」

「晃邑丸様、行きますよ」

「嫌だと言っているだろうが」

「おいおい、あまり困らせてくれるな、晃邑丸」

暗部と晃邑丸が言い争いをしていると綱手が現れた

「「「火影様」」」

「綱手さん」

「全く、命を狙われているというのにつまらないなどと、つまらないことを言い出して、まあいい、確かに面をした奴二人に張り付かれては、息抜きにやらんだろう、リーと綾崎の2人で里の中、案内してやってくれないか？」

「僕は、かまいませんけどハヤテ君は？」

「僕も別にいいですよ」

「じゃあ、頼んだぞ」

そういうと綱手と暗部は、屋敷に戻っていった。

その後二人は、晃邑丸を連れて里の中を回った。

翌日

ハヤテ、ナルト、リーの3人が綱手に呼ばれた

「何の用だつてばよ綱手のばーちゃん？」

「お前達に頼みたいことがあってな」

「任務ですか？」

「そんないきなり」

「俺は、修行しなきゃいけねーから任務は嫌だつてばよ」

「任務なら綾崎は呼ばんさ、それにナルトお前は今日修行を休めと、カカシに言われているだろうが」

「ちっ」

「なんだよかつたー」

「実は、晃邑丸が綾崎とリーの2人を気に入ったようだな今日は、少し里の外で気晴らしをさせてやって欲しいんだ」

「じゃあ俺は、何で呼ばれたんだ？」

「お前も付いて行くんだよ一人にしたら勝手に修行しそつだからな」

「げっ、ところでその晃邑丸って誰なんだつてばよ」

「あたしの知り合いの子供で親が急病で死んじまってな、親戚から命を狙われているから、今あたしが匿つてんだ」

「ふーん」

「3人ともやってくれるか？」

「はい」

「まあやっつてやるつてばよ」

「じゃあ頼んだぞ」

こうして3人は、晃邑丸を連れて里を出た。

里近くの森

「とりあえずこのあたりでいいでしょう」

「うん、最近屋敷に籠りつきりだったから、つまんなかったんだ、あっ」

晃邑丸が被っていた帽子が風で飛ぶ。

「しょうがねーな取ってきてやるよ」

ナルトが帽子を追い離れていく。

数分後

「ナルトさん遅いですね」

「そうですね、そんなに遠くに飛んでいった様には、見えませんでしたけど」

すると突然、無数の手裏剣が飛んできた。

ハヤテは、晃邑丸を抱え避ける。
リーが辺りを警戒しながら言う。

「誰です?」

すると3人の男が現れた。

「安心しなそのガキを渡せば何もしねーよ」

「なるほど、あなた達が火影様が言っていた晃邑丸君を狙っている忍ですか」

「その通り」

リーダーの男前に出て晃邑丸に向かいクナイを投げる。

「風遁 反衝風陣」

晃邑丸をドーム状の風の塊が包み向って来ていたクナイを弾く。

「ほう」

「この中にいて下さいね、すぐ終わらせます。晃邑丸君は、渡しませんよ」

「そういうことです」

リーは、リーダーの男に向かっていく

男は、笑いながら言った

「やっぱりこうなったか、まあいい準備した甲斐がある」

すると蹴りを放つリーに向かい、後ろの2人とは違う、もう一人が

出てきてリーに殴りかかる。

リーは反応できたにも関わらず、出てきたもう一人の顔を見た途端、動きが止まり殴られてしまった。

「リーさん！」

リーが殴られて驚いたハヤテは、殴った相手の顔を見るとさらに驚いた。

「！？ナルトさん」

操られたナルト

「ナルトさん！」

突然現れ、リーを殴り飛ばしたのはナルトだった。

その事に動揺を隠せないハヤテ。

「なんでナルトさんが？」

リーが起き上がりながら言う。

「おそらく何らかの方法で操られているのでしょう」

男が答える。

「その通り、その金髪の小僧は後ろの2人の術で操っている、だがお前らはいしたものだ、狙われている事が分かっている奴と一緒にいるんだ、唯の小僧共じゃないと思っていたが正解だったぜ」

ハヤテが尋ねる。

「それはどういう意味ですか？」

「丁度そいつが一人になったから操ってみたが、一人じゃ抑えきれずに2人がかりでやっと成功したし、お前の術もなかなかのものだ、もう一人の奴の動きもかなりのものだったからな」

リーが答える。

「それはどうも」

「おい、やれ」

男が合図を出す。

するとナルトが向かってきた。

「ハヤテ君、僕が敵を倒すまでナルト君を抑えていて下さい」

「わかりました」

リーが術を掛けている2人に向かっていくが、男が立ち塞がる。

「行かせる訳にはいかないな」

一方ハヤテは、操られているナルトの攻撃をかわしながら移動している。

(反衝風陣で護っているとはいえ、ここから離れないと)

晃邑丸やナルトを気遣っているハヤテと違い、ナルトは影分身を使いさまざまな角度から攻撃をする。

「螺旋丸」

「まずい！風遁 螺旋装」

ハヤテは、ナルトの螺旋丸を腕に纏った螺旋装でガードするが、螺旋丸の威力に押される。

「やっぱり押されるか」

リーと男が激しい戦いを繰り広げている。

「思ってた以上の力だ、このままやれば俺の負けだろうだが、金髪の小僧が青髪の小僧を倒してあの晃邑丸とかいうガキを殺すまでは十分持ちそうだ」

ハヤテは苦戦していた、リーとあまり力の差の無いハヤテにとって、相手が操られていて100%の力でないナルトなら止めるくらいできるはずだが。

(前に戦った時より動きが単調だから攻撃は当てられるけど、防御をまるですてこないからナルトさんの身体の事を考えると下手に攻撃できない)

「思った通りお前は甘いな、あの青髪の小僧あんな防御もせずに攻撃するだけの奴、簡単に倒せるだろうに、金髪の小僧の身体を気遣って攻撃できずにやられそうになってやがる」

その言葉にリーは気を取られ男の蹴りをくらってしまふ。

「お前も甘いんだよ、仲間のピンチに気を取られて蹴りくらいやがって」

「くっ、卑怯な」

「操られたり、そいつを気遣って攻撃できなかったり、その事に気を取られて蹴られる奴が悪いんだよ」

突然、ナルトが苦しみだした。

「ナルトさん(君)」

「おい、どうしたんだ」

男の問いかけにナルトを操っている2人のうちの一人が答える。

「突然そいつのチャクラが膨れ上がって」

みるみるうちに、ナルトはチャクラの鎧を纏いチャクラの尾が二本生えた姿になった。

「ハヤテ君離れて下さい」

ハヤテは指示通りに離れ、そこにリーも来た。

男はナルトの変化を見て、嬉しそうにナルトに近づいて行く。

「この小僧こんな力、隠してやがったのか」

それを見て部下の2人が止めようとする。

「力が大きすぎて抑えられません」

「離れて下さい」

「何？」

ドカ!!

次の瞬間、男はナルトに殴り飛ばされた。

ナルトを操っていた2人は男がやられるとすぐに逃げ出した。

「やりましたね」

ハヤテは、ナルトに近寄ろうとするが、リーが止める。

「待って下さいハヤテ君」

「もう敵はいなくなつたじゃないですか」

止められた事を不思議に思うハヤテ。

「今、ナルト君に近づくのは危険です」

「どつという事ですか」

「実は、ナルト君の中には、十六年程前、里を襲つた九尾の妖狐が封印されてるんです」

「そうだったんですか。じゃあ、あの姿はその影響ですか？」

「そうですね、本来なら三本目の尾までは、自我を保っているらしいんですが、操られていたからか今のナルト君は自我を保っていません」

「それってマズイですよね」

「ええ、今のナルト君を相手するより、さっきまでの状況の方がずっと楽でしょうね、来ましたよハヤテ君」

九尾化したナルトが2人に迫って来る

「手加減してたらやられてしまいます、全力で行きますよ」

「はい」

まず、リーがナルトに攻撃する。

「木ノ葉烈風」

リーの下段後ろ回し蹴り決まる、ナルトは、少し吹き飛ばすがすぐに着地し、リーに拳を振るう、リーはそれを避けた。

ガシ！

拳を避けたリーを、チャクラの鎧の腕部分が独自に動き捕える、そしてそのまま投げ飛ばした。

「リーさん！」

ナルトは、ハヤテに向かい突っ込んでくる。

リーが投げ飛ばされたのを見て、手加減できないと判断したハヤテは、最初から全力を出した。

「風遁 疾風の如く」

超スピードで向かっていくハヤテ。

「カッ！！」

ナルトは、自分に向かって来ていたハヤテをチャクラだけで吹き飛ばす。

「ぐあー！」

吹き飛ばされてダメージを受けたハヤテにナルトが迫る、ハヤテに近づいて来るナルトに戻ってきたリーが蹴りを放つが殴り飛ばされてしまう、さらにナルトが近づいて来てハヤテに殴りかかる、ハヤテは、それを避ける。

ガシー！！

「しまった」

リーと同じ様にチャクラの腕に掴まれる、そしてそのまま。

ドンー！！

地面に叩きつけられるハヤテ、かなりのダメージを受けもう動けないハヤテにナルトは、止めを刺そうと腕を振り上げる、リーは、ハヤテを助けようとするが動けずに見ているしかない。

ドガー！！

リーは吹き飛ばされ木にぶつかってはその木が折って進んでいく同じ年頃の少年を見た。

帰還

ナルトの腕がハヤテに迫る。

(駄目だ、体が動かない)

ハヤテは迫り来る攻撃に死すら覚悟した。

ドガ!!!

ハヤテに攻撃が届く寸前、突然ナルトが吹き飛んだ、ハヤテが見上げるとそこには、五十歳ぐらいの白髪で大柄な男が立っていて、その手には螺旋丸があった。

さらに先ほど逃げた2人が捕らえられていた。

「やれやれ、修行が足りんのう、ナルト」

吹き飛ばされた後、立ち上がりこちらに向かって来ているナルトには4本目の尾が生えようとしている。

「おっと、こりゃヤバいのう」

そう言うで大柄の男は、“押”と書かれた紙を取り出し、こちらに向かって来ていたナルトの額に張り付けた、するとナルトのチャクラが抑え込まれ、ナルトは止まった。

なんとか立ち上がってこちらに歩いて来ているリーが言った。

「助かりました、自来也様」

（この人が自来也さん、確かに僕とリーさんが手も足も出なかったナルトさんをあんなにあっさり止めるなんて、聞いていた通り凄い人なんだ）

「全く面倒な事をしてくれおつて」

そう言うと自来也はナルトに殴られ気を失っている男と自らが捕らえた2人の方を見る。

ハヤテが礼を言う。

「危ない所をありがとうございます」

「まあいいつてことよ、それよりお前らの治療をしに木の葉に戻らんとおう」

そう言うと自来也は指を噛み血を出し印を結びそれを地に向けた。
ボン！

すると自来也よりも大きな蝦蟇が現れた。

「2人とも運んでやるから、コイツの背中に乗れ」

「はい、ありがとうございます」

ハヤテとリーは蝦蟇の背中に乗り、ナルトは、自来也が担ぎ、晃彦丸は自分で歩き木の葉に向かった。

ハヤテ、ナルト、リーは治療を受けた後、病室で休んでいた。

「入るぞ」

3人の病室に入って来たのは、綱手だった。

「大丈夫か？」

ハヤテ達が答える。

「はい、もう大丈夫です」

「僕もだいぶ良くなりました」

「俺も、もう大丈夫だってばよ」

「それなら、自来也も帰って来た事だし傷が治れば帰れるぞ、綾崎」

「はい」

次の日

自来也も帰って来てハヤテの帰る準備がすべて整い最後の別れの挨拶をしていた、

リー

「少しの間でしたがハヤテ君との修行とても為になりました、元の世界に帰ってもお元気です」

ナルト

「最後に九尾の力を暴走させちまって悪かったな、帰っても元気にやれよ」

その他にもハヤテと関わった者が何人か、別れの挨拶に来てくれた。

「じゃあ、始めるぞ」

自来也と綱手は印を結びだした。

最後にハヤテが礼を言う。

「みなさん本当にありがとうございました」

ボン！

ハヤテは、三千院家の書庫に戻っていた。

帰って来たハヤテの日常

元の世界に帰って来たハヤテは、日時を確認した。すると木の葉に飛ばされてから、1時間程しか経っていなかった。

「よかったー。向こうで過ごした時間と同じだけ時間が経っていたらクビになってただろうからな」

ハヤテは書庫から出た、するとマリアがやってきた。

「ちょうどよかった、今、呼ぼうと思っていたところなんです」

「はい、何でしょうかマリアさん？」

「ナギのゲームの相手をしてあげて下さい」

その後はいつも通りの生活をしたハヤテ。

次の日 白皇学院

ハヤテがナギと共に登校していると。

「綾崎ー!!」

一人の変態が突っ込んできた。

ドガ!!

変態を蹴り飛ばすハヤテ。だが、変態もとい虎鉄は立ち上がる。

「甘いぞ綾崎、崩 流の武術が使えるように肉体を改造し、山で猿の干物のような婆さんに指で地面を砕く修行をさせられ、ゴ 君に殴られ念を使えるようになった私にはその程度の蹴りは、効かんぞ」

虎鉄は異常なタフさと防御力を身につけていた。

「クッ」

「もう逃げられないぞ、一緒にオランダで結婚しよう」

「仕方ないですね」

「おお、やっと解ってくれたか」

そう言って近づいて来る虎鉄を蹴り上げるハヤテ。

「無駄だと言っただろうが綾崎」

「虎鉄さん、僕も修行して来たんですよ」

ハヤテは、浮き上がった虎鉄に向かい跳び、また蹴り上げる、さらに風蹴りを使い空中から、虎鉄に向い跳び、蹴り上げる、これを繰り返していき上空、十数メートルの高さまで蹴り上げ、最後に虎鉄を抜き、踵落として一気に地面に叩きつけた。

ドガンー！！

さすがの虎鉄もこれには、耐えられなかった。

「おお、凄いぞハヤテ」

「いや、全くだ」

「普通の人間なら死んでるぞ」

「虎鉄君、ピクリとも動かないよ」

突然、現れた3人に驚く2人

「「うあ、いつの間に!」「」

代表して美希が言う。

「まあ、とりあえず教室に行こうじゃないか」

「それもそうですね」

5人は、虎鉄の事は忘れて、世間話をしながら教室に向かった。

帰り道

ナギとハヤテが帰っていると、目の前に巨大なメカが現れた。

それを見てハヤテは、呆れる。

「またですかギルバートさん」

呆れるのも無理もない、最近、ギルバートの襲撃は、毎日のようにあるのだ。

いつものように、首都警特機隊、ご用達の武器でメカを撃つ。

ガキン！ガキン！

いつもと違い弾が弾かれる。

「そんな毎回毎回同じ負け方はシマセーン、今回のメカは、知り合いのマッドサイエンティストに頼んで特殊合金の装甲にしてみましたので、そんな銃なんて効きマセーン」

「じゃあ、これならどうです」

そう言うとハヤテは、巻物を取り出し開いた。

ボン！

巻物から刀が現れた。

「風遁 斬風刀」

ハヤテは刀に風のチャクラを纏わせた。

「そんな刀ごときでは、このメカには傷一つ付けられマセーン」

ザン！ ゴトン！！

メカの右手が落ちる。

「マサカ、特殊合金で出来た装甲を切るなんて、信じられマセーン」

ザン！ ドタン！！

左足を切られメカが倒れる。

ゴッ！

メカを踏みつけるハヤテ。

「覚悟はいいですか？」

「ワタシには八千人の部下が「どこの狙撃手ですかあなたは！」

ザン！ザン！ザン！

どンドンメカをバラバラにしていくハヤテ。

数日後 白皇学院

「綾崎ー！！！」

「また貴方ですか虎鉄さん、また同じ目に遭いたいんですか？」

「甘いぞ綾崎、この数日で、式の鉄塊を覚え、梁 泊の達人に鍛えられ、精神が肉体を凌駕した私にはもうあんな技、効かんぞ」

「いい加減にしろ！！変態！ 風遁 反衝風陣」

ハヤテは、自分と虎鉄を半径5メートル程の反衝風陣で囲んだ。

「風遁 螺旋装」

螺旋装を纏った拳を虎鉄に叩きこむ。

「いいパンチだが、これだけじゃ私は止められんぞ」

殴られて飛ばされた虎鉄は、反衝風陣に跳ね返される。

「なにい」

跳ね返された虎鉄をハヤテがまた殴り飛ばす、そしてまた虎鉄は弾かれハヤテに向かって来る、これを何度も繰り返している。

最初は、余裕があつた虎鉄だが次第にダメージが溜まって来る。

騒ぎを聞きつけヒナギクや生徒会三人組がやって来る。

「むごいな」

「どれだけ殴る気だ」

「虎鉄くん何日も帰ってこないと思つたら、また変な修行して来たんだね」

「さすがに止めた方がいいんじゃないかしら」

そして

「これで止めだ!」

ハヤテ渾身の踵落としが決まる。

「あ、綾崎、わ、私は・・・あ・き・・・ら・・・め・・・な　ガン！」
だまれ変態」

この日を境に白皇学園に二つの伝説が生まれた。

一つは、風を操り主を守る白皇学院歴代最強の執事。

一つは、人間離れた防衛力とタフさを持った白皇学院歴代最狂の変態。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9598p/>

飛ばされた先は木ノ葉

2011年2月28日15時12分発行